

令和8年度 全国学力・学習状況調査の集計結果について

文部科学省は、令和8年4月に実施した「令和8年度全国学力・学習状況調査」の結果を公表した。この調査は、小学校第6学年及び中学校第3学年の全児童生徒を対象とし、教科に関する調査(国語、算数・数学、英語)と質問調査を実施した。

1 調査の目的

- (1) 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) 取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の概要

- (1) 調査対象 児童:小学校6年生 (18,453校)
 - (2) 調査事項 教科調査〔国語、算数、英語〕及び質問調査
 - (3) 全国(国公私)の平均正答率 小学校国語:61.1% 小学校算数:56.6%
- 以下、小学校を中心に、主な結果のポイントと課題を紹介する。

3 国語に関する調査結果

(1)「話すこと・聞くこと」について

相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることができる。

指導改善のポイントとして、構成メモを整理する際には、目的や意図、聞き手の求めていることを踏まえて、話の内容を検討する場面を設定することが重要である。

その際、集めた材料が目的などに合っているかどうかを意識しながら確かめ、より適切なものを選んだり、必要に応じて新たに集めたりするよう指導することが求められる。

(2)「書くこと」について

引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある。

指導改善のポイントとして、引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫するためには、引用する目的を明確にした上で、本や文章などから必要な語句や文を抜き出して書くことが重要である。原文を正確に引用することや、引用した部分と自分の考えとの関係などを明確にし、区別して書くことも大切である。引用する目的を児童と教師が共有しておくことが重要である。

(3)「情報の扱い方に関する事項」

考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解することに課題がある。

指導改善のポイントとして、情報と情報との関係について理解する指導事項を単元の中でどのように位置付けるとよいかを教師が意識して設定することが重要である。

児童によっては、自分の考えについて具体例を想起できなかったり、自分の考えと具体

つながる教育・つなげよう実践 0917 全学調の集計結果から見える指導改善のポイント
例を正対していなかったりすることが考えられる。これらの児童に対しては、教師や友達と交流したり、読み手の立場に立って振り返ったりする機会を設定することが効果的である。その際、自分の伝えたい考えは何かを確かめた上で、自分の考えを支える理由 や事例を複数挙げ、最も適したものを選択できるようにすることが大切である。

3 算数に関する調査結果

(1)「数と計算」について

単位分数の個 数に着目し、数直線上の 1 を表す目盛りをとらえることに課題がある。

指導改善のポイントとして、数直線上の目盛りの一つ分の大きさや単位分数の個数 に着目して、数直線上の目盛りを分数で表すことで、分数の意味や表し方について理 解を深めることができるようにすることが重要である。

(2)「変化と関係」について

単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解し、その商から 2 つの広場のどちらの方 が混んでいるのかについて判断することに課題がある。

指導改善のポイントとして、2 つの数量の関係に着目し、異種の 2 つの量の割合としてとらえられる数量の関係について考察できるようにすることが重要である。

指導に当たっては、異種の 2 つの量を比べる場合、どちらか一方の量を揃える必要があることに気付くことができるようにすること、その上で、図や数直線などを用いて、単位量当たりの大きさを求める式の意味について理解できるようにすることが大切である。単位量当たりの大きさの意味を理解し、単位量当たりの大きさから混み具合などを判断できるようにすることも大切である。

4 質問調査結果

I C Tの活用状況等について、I C T機器を「ほぼ毎日」「週三回以上」活用していると回答した学校は、小学校 95.4%であり、活用の定着が見られる。

※詳細は、文部科学省国立教育政策研究所 のホームページを参照。

<https://www.nier.go.jp/> 参考・引用 小学校時報 no901 教育ニュース

先日、6年生の算数の授業（円柱の体積）を観て思ったことがあります。

円柱の求積を個人思考している場面でした。「底面積×高さ」に当てはめながら真剣に考えていました。当該授業の内容に関わらず、解き終わるのには**個人差**が生まれます。次の対話（グループ or 全体）のスタートを合わせるための工夫を考えてみました。

- ① 早く解き終わった児童から、教室の空きスペースへ移動し、ペア対話を繰り返す。
- ② 求積の式の下に、言葉で説明する文章を書く。（はじめに、次に、だから…等）
- ③ 早く求積できた児童が、ヘルプを出している友達に付いてコーディネートする。）

